

つまり、ここでもう「古田足日特集」みたいなことは、ほぼやりつくされているわけで、今回追悼特集を組むにあたって、七九年の特集と、全集の編集の両方に関わった僕が企画に加わるのが手っ取り早いかと、この追悼号の臨時編集委員として手を挙げたような次第でした。

こういう追悼号の場合、大体の場合、まず全体像についての作家論があり、それから作品論があって、追悼文という構成になっていますが、古田足日という児童文学者は実に様々な側面というか、貌をもっていて、なかなか一人が総論を書くというのは困難な感じがあります。そこで、今回は、われわれ三人の座談会という形で、古田足日の全体像に迫ってみよう、ということになったわけです。

実はこの三人は、今話の出た『全集 古田足日子どもの本』の編集協力者四人のうちの三人でもあります（もう一人は田畑精一さん）。もちろんスタンスの違いはありますが、三人とも古田足日の大きな影響の中で児童文学に関わり、評論を書いてきた人間です。通常こうした座談会などを組む時は、そんな内側の人間で固めないで、外からの視点も交えて構築していくというのがセオリーだと思うのですが、今回はあえてこの三人でというふうにしました。それは、繰り返しになりますが、古田足日という存在が一筋縄ではない様々な側面を持っていて、そのあたり我々の間でも共通理解があるような、ないような感じなんです

ね。ですから、ある意味古田さんの近くにいた我々の間で、まずは古田足日が何者であったかということについて、可能な限り整理というか、問題点の洗い出しをして、手がかりを提起するのが第一歩という気がしているわけです。

まずは西山さんと宮川さんに、古田足日という存在がどのようなものであったか、あるいは今古田足日の死という現実を目の前にして、どのような思いでいるのかというあたりを、ざっくりばらんに語っていただければと思います。

▼わたしにとっての古田足日

西山 藤田さんから「近年はそんなに会う機会も多くな〜」というお話がありました。この中ではわたしが一番最近までお会いすることが多かったかと思えます。というのは、児童文学者協会の「新しい戦争児童文学委員会」^(注2)で一緒にして、最後にお会いしたのが、「新しい〈長編〉戦争児童文学」の最終選考をした三月二十五日。古田さんのお宅に委員が集まって行いました。『季刊児童文学批評』^(注3)などで古田さんと同志のように過ごされてきたお二人とは、わたしの場合、参加のしかたが違うというか……。しばらくの間、アルバイトとして個人的に古田家に入り出していたということもあって、古田足日を文学的に振り返る、というより、もっと私的な感慨がどうしても先に立ってしまいます。作法というか、古田足日という文化と身近に接してきた、という感じでしょうか。古田さんといえば遅筆と